

文藝春秋

創刊95周年記念 95th 完全保存版

大型企画 文藝春秋を彩った95人 / 対談 小泉純一郎×笹川陽平 新年特別号

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三十年一月一日発行 毎月一回一日発行
第九十五巻第一号十二月八日発刊

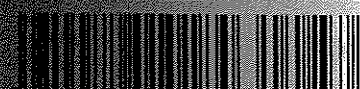


凸版印刷株式会社印刷
Printed in Japan

MAGTAC LED

4910077010184

00880



將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之
歴史学者、
東京大学名誉教授

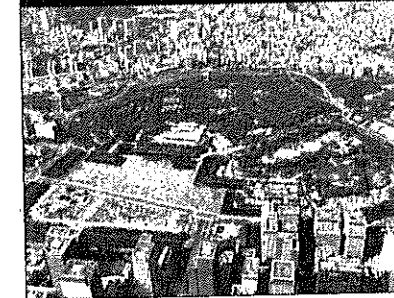
新連載

【第二回】一つの国家

江戸時代の「朝廷と幕府」の関係を紐解き、「天皇と政府」の核心に迫る――



(上) 東京の原型を作った徳川家康
(下) かつての江戸城、現在の皇居



一、夕立の空よりひろき武蔵野の原

お江戸日本橋七つだち、という俗謡の歌詞がある。旅人は、夜明け前の四時頃に日本橋から出立したというわけだ。ところで、江戸という地名に「お」の字をつけるのは少し妙な話である。しかし、徳川家康が造った江戸は、およそ二百七十年続いた徳川時代には敬意を込めて「お江戸」と呼ばれていた。三都のうち京都や大坂を「お」をつけて呼ぶことはなかった。また世界史でもそうした例はない。枕詞のような美称を都市名につける事例はあるかもしれないが、「お」のような簡潔な敬称をつける例は中国やイスラームや欧米の歴史でも寡聞にして知らない。

お江戸や江戸っ子という呼び名は、ひとえに徳川家康が八朔に江戸の小城へ入り、夜孜として町々を開発しなければ生まれなかった。八朔とは、天正十八（一五九〇）年八月一日（朔日）のことであり、家康入部の日は正月三日が日と並ぶ幕府の重要な式日として、大名や旗本が登城する。実際の家康は、八朔の吉日以前に江戸城に入っていたらしいが、日比谷の入江に面した集落はまもなく大坂のように海陸の交通や運輸で繁盛する都会に大変貌を遂げる。粗末な町家や苦屋が木陰に見え隠れする

ばかりで、東南は干潟が打ち続き、西の彼方には草茫茫たる武蔵野の原野が広がっていた。家康は、日比谷の東、隅田川（大川）河口の西にあたる江戸前島という砂州以外に、十分な平地のなかった江戸で、幾度も繰り返した城地拡大と埋立てによって町割りをつくったのである。

もつとも、江戸の原風景の描写は、家康を神格化するあまり、あたかも江戸が葦原の繁るだけの湿地帯であり、家々が点在する無主の地を切り開いた東照大権現の業績を徳川の神話に仕上げたきらいがなくもない。これはさながら、『古事記』や『日本書紀』で瓊瓊杵尊が高天原から高千穂へ、葦葦原の瑞穂国に降り立ったとする天孫降臨神話を思わせるものだ。「神君」の家康は三河はじめ豊沃な東海道筋を後に葦原の広がる江戸に入部し、武蔵野など広大な後背地を開き関八州の鎮守になるという物語が創られたからである。あるいは『万葉集』で大伴御行が、天武・持統両天皇の見事な都城造営を「大君は神にしませば赤駒の腹這ふ田居を都と成しつ」と神の宮為に喩えたように、神君は鄙びた漁村をメガロポリス大江戸に変貌させたと言いたいのだろうか（堀新「徳川家康江戸入り」『江戸を知る事典』）。

まさに、「お江戸」の誕生は、古代から天皇制の基盤だった葦葦原神話を意識した武家政治による新しい江戸

の葦葦原伝説を創ろうとしたともいえよう。

しかし、江戸に入城した家康の目にした自然は、城の礎をつくったもう一人の偉人、太田道灌が後土御門天皇の下間に応じ和歌ですぐ詠んだ、地勢の雄大な風景に通じていたことには変わりがない。寛正五（一四六四）年、家康入部の百二十六年前の逸事である。

露置かぬ方もありけり夕立の空よりひろき武蔵野の原
我が庵は松原つづき海近く不尽の高嶺を軒端にぞ見る

家康が埋め立てによって町家や道路をつくらなければ、江戸も道灌の素描した景勝のままであり、徳川から昭和にかけて繁華を極めた日本橋や京橋や銀座も、今のような姿を現すのは相当に遅れたことだろう。また、「江戸っ子」という不思議な呼び名も、「お江戸」に京橋や日本橋がなければ生まれなかったはずだ。

家康は後北条時代に原型のあった本町通りとその周辺を整備し、徳川御用達を務める職人や伝馬業者を旧領の駿河や遠江ひいては上方や遠国から呼び寄せて、神田と日本橋の周辺に住まいを与えた。日本橋や尾張町（銀座）の呉服屋、日本橋魚河岸で「江戸前」の魚介で儲けた大旦那、浅草・本所（いわゆる蔵前）の御蔵前米屋と札差、